

## 2016 年度 1 学期 学部「現代哲学講義」大学院「認識論講義」

講義題目：あなたは相対主義者ですか

入江幸男

第一回講義 (20160408)

### § 1 導入

**Course Outline:** ミュンヒハウゼンのトリレンマが示すように知を究極的に根拠づけることが不可能であるとする、主張が誤りである可能性を認める(可謬主義)ことになる。この時に生じる問題の一つは、懐疑主義を採用できるかどうかである。しかし、もし懐疑主義以外の何らかの主張や立場を採用することが不可避であるとする、その正当化はいかにして可能になるのか。可謬主義は、他の立場の可能性を認めることになるが、その場合、相対主義が一つの選択肢になるのかどうか。相対主義は可能なのか、可能であるとすれば、どのような定式化が可能なのか。意味、認識、真理、存在に関する相対主義の可能性を検討する。

**Goal :** 文脈主義と相対主義の区別と定式化を習得すること

#### 1 「あなたは相対主義者ですか」と問う理由：

ミュンヒハウゼンのトリレンマ (Muenchhausener Trilemma) が示すように、私たちは、知を究極的に根拠づけることはできない。(注：ミュンヒハウゼンのトリレンマの論証は、トリレンマという論理法則を前提している。そして、この論理法則の根拠づけについても、ミュンヒハウゼンのトリレンマが生じる。このことは、「知を究極的に根拠づけることはできない」ということも究極的に根拠づけることはできないことを示している。このことは、基礎づけ主義批判にとって、整合的である。「知を究極的に根拠づけることはできない」を究極的に根拠づけられるとしたら、それは自己論駁的である。)

そうだとすると、懐疑主義(skepticism)をとるか、可謬的であることをみとめながら何らかの主張を採用する(可謬主義(falibilism)を採用する)かのどちらかになるだろう。

懐疑主義とは、私たちは何も知りえないと考える立場である。この懐疑主義の主張を証明することは自己論駁的であるだろう。それゆえに、懐疑主義の正しさを証明することはできない。それは生きられるだけである。ただし、懐疑主義を生きることを正当化する議論もまた自己論駁的である。もちろん、自己論駁的な生を生きることは可能であるが、それについてのどのような記述も自己論駁的である。

したがって、もし懐疑主義を避けようとするならば、私たちは可謬主義を採用するしかない。可謬主義を採用することは、自分が採用している主張が間違いである可能性を認めることである。つまり、他の主張が正しいかもしれないことを認めることである。しかし、可謬主義者が、複数の主張がともに正しい主張するとは限らない。可謬主義者の中には、次の二つの立場があるだろう。

- (1)ある主張は可謬的であるが、唯一の正当化可能な主張を探求することは可能である。
- (2)互いに両立しない複数の主張がともに正当化可能であることを認める(相対主義)。

(2)の立場は、どんな立場でも認めるということではないので、複数の立場を認めるとしても、それらの正当化が可能だと考える。したがって、他の主張との論争がまったく無意味である

と考えるのではない。(もしそう考えるならば、いかなる主張の正当化も不可能だと考えることであり、懐疑主義と同じになるだろう。)

(1)の立場について、

「もしある主張が他の全ての主張を論争において常に論駁できるならば、その主張は究極的に根拠づけられているのだろうか？」

もしある主張を究極的に基礎づけできるならば、その主張はそれと両立しないすべての他の主張を論駁できるだろう。しかし、その逆は成り立たないだろう。つまり、「もしある主張がそれと両立しないすべての他の主張を反駁できるとしても、その主張は究極的に基礎づけられていないだろう。」

なぜなら、「 $\sim p$ は偽である」から「 $p$ は真である」を導出するのは、排中律、ないし二値原理を前提する古典論理を前提している。しかし、古典論理が、直観主義論理よりも正しいことを証明することはできないからである。

超越論的論証は、それに対する否定を常に論駁できるものである。ただし、それによって、知の究極的な根拠づけはできない。超越論的論証とは、主として次の形式をとる。

E (トリビアに認められる経験的命題)

$E \rightarrow T$  (T は、Eが成立するための超越論的条件を表す命題)

故に、T (Tは経験の可能性の条件として超越論的に成り立つ命題)

(Cf., Robert Stern, *Transcendental Argument and Scepticism*, 2000, 'Transcendental Argument' in Stanford Encyclopedia of Philosophy)

Kant, Fichte, K. O. Apel の Diskursethik, Strawson, *Individualism* などの議論がある。しかし、transcendental argument は Roty もいうように寄生的(parasitic)な論証である。前提 E や前提  $E \rightarrow T$  が成立することを説明する経験的な理論に寄生している(Cf. 'Verificationism and Transcendental Argument')。超越論的論証のもう一つの限界は、上述のように古典論理に寄生していることである。

そのような限界を持つにもかかわらず、超越論的論証によって、若干の言明については上記の(1)が可能になるかもしれない。しかし超越論的論証が他の理論に寄生的であるとすれば、この論証もまた相対的であるのかもしれない。

(参照、入江幸男「問答論的矛盾」、文部省科学研究費共同研究報告書 課題番号 10410004 『コミュニケーションの存在論』、p. 207-215, 2001. 'Transcendental Arguments Based on Question-Answer Contradictions' in *Transcendental Inquiry: Its History, Methods and Critiques*, ed. by H. Kim and S. Haelzel, Palgrave Macmillan, 2016 (In press))

若干の言明について(1)を認めるにせよ、認めないにせよ。多くの知について(2)の相対主義をとらざるを得ないように思われる。しかし、相対主義とはどのような立場になるのだろうか。それは自己矛盾しないのだろうか。可能だとすれば、どのような相対主義が可能なのだろうか

か。これらの問いにこの講義で答えたい。

## 2 相対主義とは何か？

ある主張を採用する人が、ある他の主張を原理的に反駁できないと認めるとき、その人は相対主義をとることになるだろう。(ただし、そのような他の主張に出会ったとき、<それは現在のところ反駁できていないだけなのか、それとも原理的に反駁できないのか>という区別ができる場合もあれば、できない場合もあるだろう。)

### (1) プロタゴラスの相対主義「人間は万物の尺度である」

プラトン『テアイテトス』は、テーマ「知識とは何か」をめぐるソクラテスとテアイテトスの対話である。全体は、3部に分かれており、次の提案を吟味する。

第一部：「知識とは感覚である」

第二部：「知識とは正しい思いなしである」

第三部：「知識とは、言論（ロゴス）を伴った正しい思いなしである」

第一部で、「知識とは感覚である」を吟味し、批判している。

「僕は、プロタゴラスの言う通り、僕にとってのあるもの、あらぬものの、あるということ、あらぬということの判別者なのだ」(160c 田中美知太郎訳「テアイテトス」岩波『プラトン全集』第二巻から引用)

ホメロス、ヘラクレイトス「あたかも流れるもののごとく万物は動いているのだ」

プロタゴラス「すべてものの尺度であるのは人間だ (Man is the measure of all things)」

テアイテトス「感覚は知識だ」(160d)

ここでのプロタゴラスへの批判は次の3点にまとめられるように思われる。

批判1：論争が無意味になるがそれでよいのか。

批判2：プロタゴラスは、他のひとにとって人間尺度説が偽であることを認めることになる。

批判3：感覚では、存在をとらえられない。ゆえに、真をとらえられない。ゆえに知識になりえない。

次は、批判1にかかわる。

「本当にもしなくても各自が感覚を通して思いなすところのものが、各自にとっては真であるということであろうものなら、また、ひとが作用を受けて、そこに受けとられたものを判定するのに他人のほうがかうまいというようなこともなければ、また思いなしの正か偽かを検査する機能は当の者よりもむしろ他の者に属するとかいうようなこともないというのであろうなら、むしろ、もう幾度も言われたことですが、各自の思いなすところのものはただひとり各自自身がこれを思いなすのみであって、しかもそこに思いなされているこ

とは皆ことごとく正しいのであれ、真なのであろうならば、ここだけの話ですが、一体そもそも何が故にプロタゴラスは知者であり、したがってまたそれは正当なことになるわけですが、他の者どもの師として尊敬され、かつ、多額の謝礼金までもらっていたのでしょうか。[…]これでは言論を交えて問答する業までが全体やはり同じことにあると思うんです。すなわち、お互いに現れているものや思われているものを、誰のだってそれは正しいものなのに、これを検査したり、これを論破することを試みたりするなんてことは、[…]疑いもなくそれは無用の長談義であり、途方もない空談であるということになるのではないのでしょうか。」(161d-e)

次の箇所は批判2に関連する。

ソクラテス「そうしてみるとあの人〔プロタゴラス〕は、自分のを虚偽だと考えている人たちの思いを真であると同意しているのなら、自分自身の思っていることを偽りだといって承認していることになるのではないのでしょうか」(171b)

Protagoras (P) は次の二つを認めるだろう。

Pにとって人間尺度論は真である。

他の人(Oにとって、人間尺度論は偽である。

上記ソクラテスの発言を、入不二基義はつぎのように解釈する(入不二基義『相対主義の極北』2001、第2章)。

Pにとって 「Pにとって、人間尺度論は真である」と、  
「……、人間尺度論は偽である」は、真である。

これだと自己論駁的であるが、正確には、次のように言うべきであり、その場合には自己矛盾しないという。

Pにとって 「Pにとって、人間尺度論は真である」と、  
「Oにとって、人間尺度論は偽である」は、真である。

これは、本当に自己矛盾していないだろうか？入不二氏は、これは自己矛盾ではないという。次は、どうだろうか、入不二氏は、次もまた自己矛盾ではないという。

Oにとって、「Pにとって、人間尺度論は真である」は偽であり、  
「Oにとって、人間尺度論は偽である」は真である。